

P2-045

自閉スペクトラム症児への診断名の説明とその理解～本人へのインタビュー調査より

山本 知加¹、辰巳 愛香¹、吉崎 亜里香¹、毛利 育子²¹大阪大学大学院連合小児発達学研究所附属子どものこころの分子統御機構研究センター²連合小児発達学研究所

自閉スペクトラム症（ASD）児への診断名告知に関する養育者へのアンケート調査研究では(岩下ら, 2010、小谷, 2011、吉田, 2013など)、3割から5割弱の子どもが診断名を知っており、その多くが12歳までに何らかの形で自分の診断名を知るが、3割以上の子どもは告知の内容を十分に理解できなかったと報告されている。健やかな自己感を育てる支援を検討するため、児童期のASD本人がどのように診断名についての情報を得、理解していくのかを調査した。

【方法】

発達外来を受診しており、すでに何らかの形でASDの診断名についての説明を受けている小学4年生から高校生1年生の5名を対象に子ども本人に半構造化面接を実施した。質問内容は、説明を受けた時期や形式、説明を受ける以前の自身の特性への気づき、説明された内容とそのときの思い、現在の思いとした。

【結果】

すべての子どもが診断名に関する説明を小学生のときに親から受け、うち2名は同時に病院スタッフから説明を受けていた。説明の内容は、子どもによって大きく異なっていた。診断以前に苦手な点に気づきがあった2名は、診断名の説明を聞いた際、「特に何も思わなかった」と感じ、現在は「色々な個性があってもいい」「(ASDがあることを)意識することがない」と感じている答えた。診断以前の気づきがありませんでしたとする2名は説明を受けた際に「ショック」「驚き」を感じ、現在は「不安」もしくは「(ASDについて詳しく知ること)を置いておきたい」と感じていた。1名は診断名について説明された内容によって、「傷ついた」と回答し、現在は「(ASDの特性を持っていることが)邪魔だ」と感じていた。本研究は、大阪大学医学部附属病院倫理委員会の承認を受けている。

【考察】

説明を受ける以前の自身の特性への気づきの有無によって、診断名について説明を受けた際の感情が異なっていた。安全な形で診断名との出会いのためには、子どもたちの自身の特性への気づきの有無を把握するとともに、特性の強みと弱みのどちらの面も実感できる支援が必要であると考えられた。また、トラウマティックな形で診断名との出会いを防ぐためには、親や教員など周囲の支援者に対して診断名の説明のあり方に関する情報提供や相談支援が必要と考えられた。

P2-046

本人に対する診断名の告知が適切な支援に結び付いた8才の自閉スペクトラム症の1例

武井 安津子

高槻病院 小児科

【目的】

自閉スペクトラム症（ASD）を持つ子どもは他者の考えを汲み取る事が苦手であるため、客観的に自分を捉えて理解することが難しい。自己肯定感を育みながら自分自身の考え方や行動パターンを知る事は、自分なりの方法で生活の困難さを軽減する技術につながるため、自己理解を促す支援が必要となる。今回、自閉スペクトラム症を持つ8歳の児に対して診断名を告知し、それを契機に自己理解が促され、適切な支援に結び付いた例を経験したので報告する。

【症例】

8才男児。周産期歴に特記事項なし。発達は順調だった。保育園の頃より落ち着きがなく、小学校入学後から授業中の離席や友達との喧嘩が多いなど担任から指摘されるようになった。小学校2年生の時に店からお菓子を盗み、家族がスクールカウンセラーに相談したところ発達障害の疑いを指摘され、当院を受診した。初診時WISC-4(8才2か月):全検査IQ109、言語理解指標119、知覚推理指標104、ワーキングメモリ指標94、処理速度指標104。対人関係が苦手、場にそぐわない言動や行動をとる、こだわりが強い、感覚過敏があるなどの特徴からASDと診断した。母のみに診断名を告知していたが、本人が母に「発達障害という言葉聞いた事があり、自分に当てはまる事なら知りたい。」と言うようになり、家族が本人への説明を希望した。本人に発達障害の特性がある事を伝え、自分なりの対策を講じれば困難さは減り、そのための対策を一緒に考えていこうと説明したところ、本人は安堵した表情をみせた。その後は家族や学校の先生と連携しながら、ひとつひとつの問題に対して本人の意見を尊重した解決策を考え、実践し、結果を振り返って次につながる支援を心掛けた。次第に自分で工夫し問題解決できる場面が増え、情緒や行動が安定するようになった。

【考察】

比較的低年齢の児でも、発達特性に照らし合わせた説明を行う事で本人の考えが整理され、自分自身の考え方や行動パターンに気付きやすくなり、自己理解が促される可能性があると考えられた。一方で告知後に不安が増強する・自己否定がさらに強まるなどのリスクも懸念され、告知する時期や方法についてはケースごとに慎重に検討されるべきである。今回の症例は、本人に対する診断名の告知が自己理解を深めるための大きなステップとなり、適切な支援につながったと考えられた。